

槐

平成 15 年 5 月号



PDF 制作

俳誌の salon

ブラツクホール

高橋将夫

春の山羽織袴を脱ぎにけり

風車回るブラツクホールかな

風炎やぬつと出でたる亀の首

葱坊主度肝抜かれてをりにけり

天袋 春の愁をほうりこむ

魂を紙風船に吹き込みて

のどやかに冥府の門の開いてをる

ひたひたと闇の寄せくる桃の花

うららかに水面を跳ねる礫かな

満天星の花をとりまく女かな

不増不減田螺が鳴いてをりにけり

笑 う て

中 田 禎 子

折れ枝の杖てふてふのあとついて
古井戸や咲き満ちみちて雪柳
眼白くる献立表のまるじるし
いくたびも曲りたる道春日傘
薔薇の門ブロンズ像の肌かな
漂うてたんぽぽの絮宇宙基地
揚雲雀 UFO の来る蒼さかな
しやぼん玉の七いろあぶく人魚姫
エリカ咲く荒野に影の走るかな
子雀やわれに泣きたる歌ひとつ

特別作品

てのひらに水晶の玉春の星
矛蔵や櫻の闇にこ糸のあり
夜櫻のてつぺんにあり五芒星
櫻鯛うす影法師立ち止る
 πr^2 水面にさくら吹雪かな
風船の大和青垣越えにけり
花蘇枋女人高野の橋渡る
松の花紙ひこうきの高さかな
囀やこの村に入り過ぎにけり
うららかなや笑うてみたる邪鬼の顔

槐安集

市場基巳

老猫に呼ばれるからは闇汁か
冬帝の許すかぎりを鯉生きて
グラスの氷魚声つまらせて啼くもあり
朝夕に見し冬潮と離れて寝る
春になるさきがけ草の露大きい

水野恒彦

魚氷に上り極上の暁の紺
涅槃雪銀器ふれあふ音すなり
向ふにも海市見てゐるひとりかな
ひとすじの地上に春の氷柱かな
絵蠟燭点されてゐし雪解かな

石脇みはる



早春や千早赤坂村野づら
露座佛の半分かげり梅の花
山菜莢やいわや窟に燭立つる
しほ垂るる栄螺を笥に入れにけり
伊勢みちや黒き田の土あたたかし

竹内悦子

枸杞の芽やゆるびてゐたる蝶番
黒猫の黄金くがねの眼春の潮
炒りたての珈琲の香や苜蓿
税務署の扉軽くて桃の花
白楊山をどよもす風のあり

木下野生

つぎの間はすこしくらくて鬼の豆
ひと握りほどの残りて鬼の豆
薄氷しづかに風の吹いてをり
通りぬけでできる洞穴春の雲
野を焼く火大きな川の流れつつ

中島陽華

かつら脱ぐ紅梅の香立ちにけり
春隣国栖の翁の眉動く
鮫鱈吊られ極楽の風吹けり
南天喉飴江上のおぼろかな
如月の白き館の彩あやうるし漆

延広禎一

牛日の水晶宮に省二居る
石の波動笑ひの波動墓出づる
神の梅飛んではるかや六連星
情つ張りの野老の髯にさはりたる
立春の水沸いてをり隠し香

栗栖恵通子

蜃気楼脚立に踵ありにける
春月の裾に来てをり黄さとめぐり領蛇
鬼やらひ片身に塩を振つてをる
朧夜の百物語あとひとつ
逃水の果てに神棚ありにけり

槐市集

天野きく江

鯽割つておほきな夜となりにけり
春浅き木の葉の艶に誘はるる
水仙を知りたるあとの少女かな
あやとりの子供となりぬ春隣
鳥交むとき大いなる一樹かな

雨村敏子

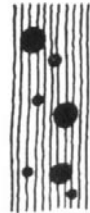
寒林を越えてゆきたる鳥の群
あをあをと水を潜りし御形かな
ぼんかんを剥くやななつの海展け
豆まきの鬼の面テの穴ふたつ
竜天に湯浴の刻の静かなる

岩月優美子

料峭の黄の花ぼつりぼつりかな
梅の香の疎らにバイオ研究所
黒松の踏ん張つて立つ余寒かな
光る風クリムトの色醸しけり
蚊こもりゆう竜の動きと思ふ春怒涛

植木戴子

天地や川面を渡る涅槃西風
厄落神矢授かる日和かな
うつた姫波打ち際を歩きをる
鳩鳥の水尾追ひかけし日差しかな
雑木山にぬくみありけり露の臺



槐集

高橋将夫選

春の星こだまの帰るところかな	大阪	加藤	みき
雪解野やまなぶた閉じて眩しかり			
飛花落花水音たかき日なりけり			
黒面の佛の口や花の冷え			
汁椀に浅蜷のあたる音なりき			
白息の肩より流れ北の海	枚方	雨村	敏子
馬頭観音いちめんの雪の原			
雪原にけものの過ぎし色のあり			
夕暮の口中赫し雪燦燦			
第一楽章アレグロ寒明くる			
干されある鬼の衣に春の塵	京都	竹中	一花
蛇塚や吹きあげられし春の雪			
石室のぐるりのパンジーなりしかな			
春星や鬮體そろそろ起きるころ			
法螺貝の音湖にあり糸柳			
濡れついでにと亀鳴いてくれにけり	香川	黒田	咲子
法然の大池よもぎ摘みごろに			
経塚の山ぞゆゆしき鳥の巢			
鮎子を白いどぜうと云わはつて			
デスマスクあれは山茶莢咲くころと			
早春の山彦濡れて戻りけり	岡崎	近藤	喜子
モナ・リザの微笑み春の氷かな			
蛇穴を出づ石棺の蓋のづれ			
引鶴のこゑ東となる天路かな			
草々のぱつと輝く雲雀かな			
ぼつぺんを吹くやふぐりのぬくきこと	明石	男波	弘志
蛇身なり女身なり水ひたひた寄す			
眼の穴に石ころ積まれ春半ば			
はじめからおたまじやくしの塊りなり			
五体なり赤ン坊なり抱かさるる			

銀河往來

高橋將夫

〓オノマトピア〓

フランス語のオノマトペを英語で言うとおノマトピアになる。オノマトペは擬音語のことであるが、日本語では擬態語も含む。たとえば、「春雨がしとしと降る」という場合の「しとしと」がそれである。オノマトペは俳句でも有効な技法だが、「春雨がしとしと」では俳句にならない。春雨は大抵そんな降り方だからである。意外であって、それでいて、妙に納得させられる場合に作品として成立するといえる。オノマトペは通常、感覚・感性に訴えるが、意味を持たせて成功する例もある。「熊蟬がわしわしと啼く…」という短歌作品では、「我が我が」と自己主張する理屈が、みごとに擬音に転換されている。

大鯉のぎいと廻りぬ秋の屋 岡井省二

「ぎい」が擬音。鯉が水中で回るとき、「ぎい」と音がするはずな
どないのに、妙に納得させられる。本句はこの擬音で評判を得た。

ところで、擬音の効果は感性をくすぐり、作品としての見せ場をつくるが、それだけに終わってしまうことが多い。この点に充分留意しておくことが肝要といえる。本句は「ぎい」というオノマトペで評判を得たと言ったが、決して擬音のおもしろさだけに終わっていない。秋の昼に鯉が描く大きな円を見ている作者の精神の位相を思い浮べてほしい。この作品の真価はそこにあると私は思っている。

春の星こだまの帰るところかな 加藤 みき
春の夜空。こだまはどこへ帰ってゆくのだろうか。星々のところへ、
宇宙へ、省二先生のもとへ。

第一楽章アレグロ寒明くる 雨村 敏子
標準より「速く」、そして「愉快」に春の第一楽章がいよいよ始まる。
新生「槐」の序曲は終わった。

干されある鬼の衣に春の塵 竹中 一花
春の埃は、法衣でも、鬼の衣でもおかまいなし。節分の鬼になった
人の着物などということわりは蛇足。

濡れついでにと亀鳴いてくれにけり 黒田 咲子
せつかく甲羅干しをしていたのに、水が撥ねて濡れてしまった。
鳴いたのは、そのついでだという。いつもは水の中にいる亀に言わ
れリヤア、世話がない。

早春の山彦濡れて戻りけり 近藤 喜子
山彦が濡れて、かえってきたというから恐れ入る。よほどしめつば
い山彦だったのだろう。

ぼつぺんを吹くやふぐりのぬくきこと 男波 弘志
(やみつきのぼつぺんを吹くばかりかな 岡井省二)
(以下略)